

「フィリピンのカテドリック教育財団と連携、同財団が運営する中高一貫校を来年6月からグループ校とし、名称を『八戸学院カテドリック高校』とする」。9月22日、学校法人光星学院の法信新一理事長と、八戸学院大学学長の大谷真樹常務理事は八戸市で記者

**八戸と未来へ**  
光星学院創立60周年

▶下◀

### 国際展開で人材育成



特進コース3年の英語の授業。ミニテストでは互いの解答について話し合い、表現力を磨くという

## 人口減の克服目指す

会見し、国内の学校法人では学はどうか対応するのか。同法例がない、外国人向け教育施設が2016年に掲げた「新設の海外開設を発表した。人口減、少子化に地方の私教育の質向上、学院の特色強

立体的総合学園構想」では、強化、国際教育の研究と実践の4方針を掲げた。フィリピンでの中高一貫校開設は

「国際教育の実践」に当たる。同法人は10月、同様の体制で同国にIT(情報技術)専門の4年制大学を19年に設置する方針を示した。カテドリック高校や大学で同法人が提供するカリキュラムを受け、日本語や在留資格を身につけた現地の生徒

「国際教育の実践」に当たる。同法人は10月、同様の体制で同国にIT(情報技術)専門の4年制大学を19年に設置する方針を示した。カテドリック高校や大学で同法人が提供するカリキュラムを受け、日本語や在留資格を身につけた現地の生徒

大谷学長は取材に「人口減少下の社会や経済の維持にグローバル化は不可欠。外国人の人材を育成し、地元企業に仲介する役割を教育機関が果たす」とした。

一方、八戸学院大学や光星高校などの生徒、学生には、国際感覚を養うためフィリピンへの語学留学を勧め、外国人を雇用する企業の語学研修にも積極的に取り組むたいとする。「外国人との共生の流れは止められない」と大谷学長。「学校の定義も変わるだろう。校舎が八戸にあるだけでは誰でもが学べるようにな

り、学生や生徒の教育の場から地域全体の「知の拠点」となる」と推測する。

法信理事長も法人の国際戦略を踏まえ、人口減少に対応しつつ教育機関の役割を果たすには、生徒や学生の多様性を意識した人間形成が必要と説明。その例として、スポーツ強豪校として著名な光星高校の普通科特別進学コースを挙げる。八戸地域での設置は同校が初めてだったという。

前身の「Lコース」開設は1969年。2004年のコース再編で特進コースとして制も充実させ、東北大など国立大、慶応大など有名私立大の合格者を多数輩出してきた。現在は1〜3年の計64人が通常の授業前に講習を受けると勉学に励む。生徒の多くは部活動にも打ち込み、バスケットボール部副部長で3

年の石橋みなみさんは「部活と勉強の両立は大変だが、どちらも楽しいし、充実している」と話す。目標は県内の国立大学への進学だという。

新立体的総合学園構想を機に、同校の大学進学をさらに強化したいと小野崎龍一校長は意気込む。「進学先として優先的に選択される高校としたい。革新的な取り組みが不可欠だが、私学ならではの魅力の伸びしろはまだある」。そうして集まった多様な人材への教育が、地域社会への貢献につながることを確信する。

社会環境の変革に対応した新たな施策で未来を開こうとする光星学院。その根底には、子どもたちの多様な個性と地域のニーズを重んじる「建学の精神」が、60年を経ても脈々と流れ続けている。

(若松清巳)